

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所所藏の朝鮮本

『選賦抄評註解刪補』について

芳 村 弘 道

一 『選賦抄評註解刪補』の概要と所藏狀況

朝鮮本『選賦抄評註解刪補』は、序文「選賦抄評序」（後掲）の冒頭に、編者の甥姪が「選賦の抄録」をもち來たつて教えを請い、それが編纂の端緒となったことを記している。明末の吳興の鳳笙閣凌森美は、『文選』の「賦」類を抽出して明の郭正域などの評を加えた朱墨套印本の『選賦』六卷を刊行した。「選賦抄評序」にいう「選賦」が凌森美本『選賦』の抄録であったかを確認するすべはないが、後述することく、『選賦抄評註解刪補』は一七五〇年に刊刻されているので、明末凌氏本『選賦』であった可能性も否めない。ただし『選賦抄評註解刪補』は、『文選』の「賦」類の範圍に止めず、卷一に「騷」類の「離騷經」、卷七に「書」類の孔稚圭「北山移文」、「辭」類の陶淵明「歸去來辭」、卷八に「七」類の枚乘「七發」・曹植「七啓」・張協「七命」、さらに卷九には『文選』外の北周の庾信「哀江南賦」と唐の王勃「夫子廟」に及ぼしており、かえって『文選』所收の「賦」類の王延壽「魯

靈光殿賦」などの十三篇を省いており（所收の篇目は小文末尾に擧げる）、独自の編集を行っている。

『選賦抄評註解刪補』には編者姓名が記されていない。藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究（集部）』（京都大學學術出版會、二〇〇六年二月、頁六三・六四）は、愛知縣西尾市岩瀬文庫所藏本を唯一著録し、「研覈」の項目に「中國にその書名は見えず朝鮮人編か」と推測している。さらに「刊記」の項目に「序文第二張裏第五行『庚午八月安東府開刊』と記し、「研覈」において、「刊記に見える『庚午』とは版式から見て、英祖二十六年（一七五〇）であろう」と見做し、「諸書目を検するに安東に『選賦』の冊板ありとするが、本書に該當するのであろう」と述べる。安東は慶尙道安東府、すなわち現在の慶尙北道安東市に當たる。藤本氏の研究書が著録する岩瀬文庫所藏の木版本四冊の版式は「四周雙邊 内框一九・四×一五・九 十行二十字 註雙行字數同」、版心は「上下内向二葉花紋黑魚尾 魚尾間『選賦卷之幾 幾』」というものである。

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所は本書を三種收藏する。いずれも木版本である。そのうちの一種は、殘本一冊（存序目・卷一・二。卷二末に缺葉あり）であり、岩瀬文庫と同版の十行本である。藤本氏は「研覈」の末に「同一書名で無刊記九卷、十一行二十三字本があるが、未見」とされる。當研究所の他の二種は、藤本氏未見の十一行二十三字本であり、一種は五冊本、またの一種は六冊本である。六冊本の末冊は『楚辭集注』本の「九歌」、「九章」、「天問」を収録して一卷としたものであるが、その本文首行は、奇妙にもまた「選賦抄評註解刪補卷之一」と題している（尾題は「選賦卷之一終」）。兩種の十一行本の首冊には、序文と刊記がなく、僅かに「選賦抄評註解刪補目錄」一葉を附すのみである。ただし十行本「目錄」末にある「刪去十三篇目錄」が削除されている。兩種の十一行本の版式は、いずれも單邊（二〇・四×一三・九糎）、注小字雙行であり、版心は十行本と同一で、上下内向二葉花紋黒魚尾、上魚尾の下に「選賦卷之幾」、下方に葉次「幾」とある。版刻の様式と料紙から推測すると、十一行二十三字本は十行二十字本より後に、行數・字數を増し板木を節約した重刻本であり、その時期は、おおよそ純祖、憲宗期（約十九世紀前半。中國では嘉慶、道光年間）に相當しよう。十行本と十一行本の本文首行は、同じく「選賦抄評註解刪補卷之一」と題し、第二行は「（低一字）文選（空十字）蕭統撰集」とする。

黃建國・金初昇主編『中國所藏高麗古籍綜錄』（漢語大詞典出版、一九九八年二月、頁一一六）に著録する「選賦評九卷（梁）蕭統撰集 朝鮮刻本」は、恐らく本書を指し、その所藏機關は僅かに延邊大

學圖書館の一所を擧げるに過ぎない。日本國內の所藏も稀少であり、上記の岩瀬文庫のほか、管見では宮内廳書陵部の兩本を知るのみである。『圖書寮典籍解題 漢籍篇』（宮内廳書陵部、一九六〇年三月、頁一〇八上段）の總集類〈朝鮮版〉に「選賦抄評註解刪補 梁 蕭統撰 清 道光 五冊 三〇三・一一」と著録され、またの一本は「全國漢籍データベース」に「選賦抄評註解刪補 即一名騷賦評註 梁 蕭統 清光緒 朝鮮寫 4冊 宮内廳書陵部 303・19」と見える（なお前者の一本は「選賦抄評註解刪補 梁 蕭統 清道光朝鮮版 5冊 宮内廳書陵部 303・11」と著録）。

一方、本書が朝鮮における比較的晚出の漢籍であるので、さすがに韓國の所藏は多い。『韓國所藏中國漢籍總目』五《集部》（學古房、二〇〇五年五月）の頁一七七一―一八二には、高麗大學校の晚松文庫を始めとして木版本五五點、寫本四點を著録する。また頁一七六所載、高麗大學校の晚松文庫所藏の八點（木版本六點、寫本二點）の『選賦朱評註解刪補』は、「抄」を「朱」に誤記したものであり、さらに頁一七七に「選賦抄」として著録する同文庫所藏の卷一・二の殘本は庚午安東府の刊本であり、これも『選賦抄評註解刪補』であるので、これらを加えると、すべて木版本六二點、寫本六點の多きに達する。

二 『選賦抄評註解刪補』の特色

十行本に載せる編者の「選賦抄評序」から本書の特色を窺ってみた。まずその全文を以下に録しておこう。

向余之居峽庄、有一姪袖一書請學焉。卽選賦抄錄者、開卷多有未

解之義。求得書館印本而觀之、則乃五臣及李善註合刊者也。其爲解非不詳、而第以其兩註竝取、故語多重複。且欲詳出處、人與書竝載、故極煩冗。一字之訓、成至十餘言之多。無補於釋義、而有眩於攷實、心竊歎然。又得皇明張鳳翼註本而校之、則刪二註之煩、而撮其要、去諸人之名、而存其言。字省而辭簡、解約而旨明、可謂善矣。而猶不免有詳略之偏。不計妄率、旁搜他書、略加補註。如「吳都賦」「去戲自閭」之「去」字之類是也。獨恨夫書籍不廣、考證未該、闕遺者尙多。同志之士、幸亦留意而踵成、則豈不爲後學之助乎。至於「靈光」以下十三篇、則文非不佳。而人各異尙、古人已有病之者、故刪之。「北山」以下五篇、則散錄於文類中、而有賦體、故取之。庾信、王勃之作、雖不載『選』中、而亦鳴世之文、故援而附于末。至若「離騷」、乃辭賦之宗、而昭明纂次反錄於諸作者之後、故拔以冠之首。雖或有僭加去取之事、亦不敢妄意穿鑿以傳會也。然而余之抄成此書、初欲爲子姪備遺忘、而至於刊布非素志、寧無具眼之笑刺乎。幸覽者之恕其僭猥而取舍之。向に余の峽庄に居るや、一姪有りて一書を袖にして學ばんことを請ふ。即ち選賦の抄録の者にして、開卷多く未だ解せざるの義有り。書館印本を求め得て之を觀れば、則ち乃ち五臣及び李善註の合刊の者なり。其の解を爲すこと詳しからざるに非ざれども、第だ其の兩註竝び取るを以ての故に語重複多し。且つ出處を詳しくせんと欲し、人と書と竝び載せ、故に煩冗を極む。一字の訓、成して十餘言の多きに至る。釋義に補ふこと無くして、攷實に眩すること有り、心竊かに歎然たり。又た皇明の張鳳翼註本を得て

之を校すれば、則ち二註の煩を刪りて、其の要を撮り、諸人の名を去りて、其の言を存す。字は省きて辭は簡、解は約にして旨は明らか、善と謂ふべし。而れども猶ほ詳略の偏有ることを免れず。妄率を計らず、他書を旁搜し、略ほ補註を加ふ。「吳都賦」の「去戲自閭」の「去」字の如きの類是れなり。獨り恨む夫の書籍廣からずして、考證未だ該からず、闕遺する者尙ほ多きを。同志の士、幸はくは亦た意を留めて踵ぎ成さんことを、則ち豈に後學の助けと爲らざらんや。「靈光」以下十三篇に至りては、則ち文は佳ならざるに非ず。而れども人各おの尙ぶを異にし、古人の已に之を病とする者有り、故に之を刪る。「北山」以下の五篇、則ち文類中に散録せらるるも、賦體有り、故に之を取る。庾信、王勃の作は、『選』中に載せざれども、亦た世に鳴るの文にして、故に撥りて末に附す。「離騷」の若きに至りては、乃ち辭賦の宗なるに、昭明の纂次は反て諸作者の後に録す、故に抜きて以て之を首に冠す。或いは僭(分をわきまえず)して去取を加ふるの事有りと雖も、亦た敢て妄意穿鑿して以て傳會せざるなり。然り而して余の此の書を抄成するは、初め子姪の爲に遺忘に備へんと欲するにして、刊布に至りては素志に非らざれども、寧くんぞ具眼の笑ひ刺ること無からんや。幸はくは覽る者の其の僭猥して之を取捨するを恕せんことを。

この序文は、内容上「至於靈光」より前を前段、その後を後段と分かつことができる。前段の内容は、本書の注解の宗旨である。編者が五臣・李善の六家注の「煩冗」さを厭って、六家注本を刪節し、その

要を取った「皇明の張鳳翼註本」（『文選纂註』十二卷）を用い、また他書を参考して少しく補注を加えたことを述べており、本書書名「註解刪補」のいわれを説いている。なお編者が用いた「五臣及李善註合刊者」の「書館印本」とは校書館活字印本五臣・李善合注の六家注『文選』である。

後段の内容について論ずる前に、本書（以下『刪補』と略稱）の「註解」について、「西都賦」の冒頭を挙げ、明の張鳳翼『文選纂註』（以下『纂註』と略稱。底本は華寶齋書社、二〇〇二年六月、影印明後修本『文選纂註評林』）と對比し、その一斑を窺っておきたい（なお『文選纂註』に見えない注文を傍線で示し、また括弧に兩書が摘録した六家注を加えた）。

① 有西都賓問於漢東都主人曰、「盖聞皇漢之初經營也、常有意乎都河洛矣。輟而弗康、寔用西遷、作我上都。主人聞其故而覩其制乎。主人曰、未也。願賓據懷舊之蓄念、發思古之幽情。博我以皇道、弘我以漢京。賓曰、唯唯。漢之西都在於雍州、寔曰長安。左據函谷二嶠之阻、表以太華終南之山。右界褒斜隴首之險、帶以洪河涇渭之川。衆流之限、汧涌其西。」⑥

① 『刪補』假爲賓主問答。時漢都洛陽、故東稱主、西稱賓。

② 『纂註』假爲賓主以相問答。時漢都洛陽、故東稱主、西稱賓（呂延濟注）。

② 『刪補』河洛、東都。輟、止。康、安。上都、西京也。『纂註』東都有河南、洛陽、故曰河洛（李善注）。輟、止也。康、安也。經營猶構立也。言天子止於河洛、以爲不安。是以西遷

上都。上都、西京也（張銑注）。

③ 『刪補』據、舒。蓄、積。幽、深也。言舒發思舊深情、以皇道西京之事。弘、博我也（李善注、『論語』顏淵曰、「夫子博我以文」）。我以文也。

④ 『纂註』據、舒也。蓄、積也（李善、李周翰注）。皇道、大道也（前文「皇漢」、張銑注「皇、大也」。漢京、長安也（李周翰注）。

⑤ 『刪補』唯、應辭。長安、言可長久安寧也。『纂註』唯、應敬之辭（劉良注）。漢稱長安、言可長久安寧也（呂延濟注「漢稱長安、言可長安子孫」）。

⑥ 『刪補』其谷如函、故曰函谷。二嶠、太華、終南、竝山名。表、標也。

⑦ 『纂註』其谷似函、故曰函谷。二嶠、兩山名。在秦東、故曰左表、儀表也。太華山在秦東、終南山在前、遠望以爲標也（呂延濟注）。

⑧ 『刪補』范曄漢書班固傳無衆流以下八字。褒斜、谷名。隴首、山名。

⑨ 『纂註』褒斜、谷名。隴首、山名（呂向注）。洪河、大河也。涇、渭、二水名（劉良注）。

また序文に「補註」の例として挙げる「吳都賦『去戲自閭』之『去』字之類」とは、「吳都賦」の「藏鏹於人、去戲自閭。家有鶴膝、戸有犀渠（鏹を人に藏して、戲を閭より去す。家ごとに鶴膝有り、戸ごとに犀渠有り）云云。」の段落の一つの注釋である。「去戲自閭」におい

て、『纂註』は呂向注「戯、楯之器、亦自閭里取之也」を摘取して句意を註釋し、「去疑作取」と注するが、この注は全く考據性のないもので、妄解というべきものである。そこで『刪補』は『纂註』に従わず、「去亦藏義、見『漢書』蘇武傳「掘野鼠去草窠（而食之）」（筆者注「窠」は實の別字）」という独自の注釋を加える。「去」字が「藏弃」の「弃」と通用し、「藏斂於人、去戯自閭」の「藏」と「去」が對文同義であり、さらに『漢書』に徵證しており、訓詁において洵に翔實である。またこの段の各句は兵器の藏儲を表現しており、文意においても的確な注釋になっている。「去」字を「藏」の義とする『刪補』の説は、従うべき訓注と高く評價できる。上引『西都賦』注の⑥は、『文選』と『後漢書』班固傳との異同の注記であり、『刪補』には校勘の「補註」も施されている。

さて「選賦抄評序」の後段は、所收の篇章の刪補改編についての説明になっている。編者は王延壽「魯靈光殿賦」など『文選』原編にある賦十三篇を刪去し、「北山移文」等の文五篇を「賦體」と見做して録入している。また「離騷經」を「辭賦之宗」として首篇に配する改編を行い（注釋は『文選纂注』を用いず、朱熹「楚辭集注」を採って刪節を加える）、北周（『刪補』の題下は梁とする）の庾信「哀江南賦」と唐の王勃「益州夫子廟碑」の二篇を「名世之文」と評して末尾に附載した。書名の「刪補」の二字は、『文選』の賦十三篇を刪去し、他の作品を補入した編集の意味も表している。本書は、單なる『文選』の「賦」類のみを選録した「選賦」ではなく、李朝の朝鮮學人によってこしらえた独自の編集がなされ、またこれに独自の注釋も加えられた、

いわば『文選』から派生した附注の辭賦選であるといえよう。

三 張鳳翼『文選纂注』と『選賦抄評註解刪補』 編纂時期

『刪補』の編者が注釋の参考に用いた張鳳翼『文選纂注』十二卷は明末・清初に盛行し、版本の種類は頗る多い。そのうち萬曆八年（一五八〇）の刻本が最も早い。萬曆十年（一五八二）に建陽の克勤齋余碧泉は、劉辰翁等十三家の眉批を加えて『文選纂注』を重刻し、さらに萬曆二十四年（一五九六）に余氏はまた『文選纂注評苑』二十六卷を刊刻している。その後、晉陵の惲紹龍は余本を刪訂し（評者姓氏を刪去し、字句を修訂する）、『文選纂注評林』十二卷を軟體の字様で出版した。明末の天啓六年（一六二六）に至り、盧之頤は『文選纂注』系統の評本が採用したのと同じ底本に據り、十二家（余本十三家の劉辰翁・王世貞を留め、他の十家を新輯）の評を收載して『昭明文選』二十四卷本を刊刻している（評本『文選纂注』の各種の版本については、趙俊玲『《文選》評點研究』上海古籍出版社、二〇一三年一月を參考した）。朝鮮本『選賦抄評註解刪補』は、「選賦抄評序」に張鳳翼本を用いたというが、それは評本の『文選纂注』であったと思われるが、何本に依據したのかは分からない。

なお先に引用した「選賦抄評序」に張鳳翼を「皇明」の人と稱しているのに著目すると、本書の編者は、李朝鮮が明の冊封を受けていた時期、もしくは明から代わって清の冊封を受けてもなお明を正統視していた時期、おおよそ明末・清初（十七世紀前後）の人と見做しう

る。ただし「選賦抄評序」末の「余の此の書を抄成するは、初め子姪の爲に遺忘に備へんと欲するにして、刊布に至りては素志に非らざれども、寧くんぞ具眼の笑ひ刺ること無からんや。幸はくは覽る者の其の僭猥して之を取捨するを恕せんことを」という文は、上梓に臨んでの謙辭と思われ、さすれば刊記「庚午八月安東府開刊」に示された英祖二十六年（一七五〇）に近いころに本書が成立し、編者も十八世紀の人であつたと推測できよう。

『刪補』の「選學」上の意義などについての詳細な研究は將來に期すことにして、今は上述の通り概略を述べるに止める。最後に「選賦抄評註解刪補目錄」を引録し、また當研究所所藏の三本の書誌事項を記して参考に備えたい。

選賦抄評註解刪補目錄（十行本に據る）

卷之一

離騷經 屈原

西都 班固

東都 張衡

南都 張衡

卷之二

西京 張衡

東京

卷之三

蜀都 左思

吳都

魏都

卷之四

甘泉 楊雄

籍田 潘岳

子虛 司馬相如

上林 楊雄

羽獵 楊雄

長楊 潘岳

射雉 潘岳

卷之五

北征 班彪

東征 班姬

西征 潘岳

登樓 王粲

天台山 孫綽

蕪城 鮑昭

秋興 潘岳

雪 謝惠連

月 謝莊

鵬 賈誼

鸚鵡 禰衡

鶴鶴

張華

七啓

曹植

楮白馬

顏延之

七命

張協

舞鶴

鮑昭

卷之九

卷之六

班固

哀江南

庾信

幽通

張衡

夫子廟

王勃

思玄

司馬相如

長門

陸機

刪去十三篇目錄

王延壽

歎逝

陸機

魯靈光殿

何晏

寡婦

潘岳

景福殿

木華

恨

江淹

海

郭璞

別

江

宋玉

文

陸機

風右五篇舊在蕪城下秋興上

潘岳

卷之七

稽康

閑居

張衡

琴

潘岳

歸田右二篇舊在思玄下長門上

向秀

笙

成公綏

思舊

潘岳

嘯

宋玉

懷舊右二篇舊在長門下歎逝上

王褒

神女

陶淵明

洞簫

傅毅

好色

孔稚圭

舞

馬融

洛神

曹植

長笛右三篇舊在文下琴上

宋玉

北山移文

陶淵明

高唐右一篇舊在嘯下神女上

宋玉

歸去來辭

陶淵明

卷之八

枚乘

七發

【書誌事項】

十行本

書名巻冊 選賦抄評註解刪補九卷（存卷一・二、卷二末有缺） 一冊

編撰者 未詳

出版事項 庚午〔朝鮮英宗二十六年（一七五〇）〕刊（慶尙道安東府）

整版

表紙裝訂 楮紙反故表紙（三〇・〇×二〇・三糎） 改装 五針眼裝

版式 四周雙邊（一九・六×一五・七糎） 有界十行二十字 注

小字雙行 版心白口 上下内向二葉花紋黑魚尾 上魚尾下

「選賦卷之幾 幾（丁付）」

藏書印 無

表紙の後に反故の共紙の護葉一葉を附し、大字「離騷 子」などの墨書が両面にある。次に序二葉（有界八行十六字）、首行「（低二格）選賦抄評序」、文末の後に空三行にて刊記「（低五格）庚午八月安東府開刊」。次に「選賦抄評註解刪補目錄」四葉（有界十行）、巻次「（巻之幾）一行、一行一篇題、題下に撰者本姓名（字を用いない）を記す。巻九の後に「刪去十三篇目錄」がある。「目錄」に續き本文となる。首行「選賦抄評註解刪補卷之一」、次行「（低一格）文選（空八格）蕭統 撰（巻二作選）集」、第三行「（低二格）離騷經」、次行以下朱熹『楚辭集注』による本文となる（序は低三格、本文は平擡）。巻二の首二行は同じ、第三行「（低二格）西京（空十一格）漢 張 衡」、以下低三格の序に續き、平擡で本文。巻二第三十三葉までを存し、以下を缺く。墨筆による批點、書込あり。

十一行本

書名巻冊 選賦抄評註解刪補九卷附一卷 六冊

編撰者 未詳

出版事項 〔朝鮮純祖、憲宗期〕刊（後印） 整版

表紙裝訂 支子色地卍字繫紋空押表紙（二九・一×一八・五糎） 原裝

五針眼裝 墨筆打付外題「選賦 幾」、右下方に「共六」。

版式 四周單邊（二〇・四×一三・九糎） 有界十一行二十三字

注小字雙行 版心白口 上下内向二葉花紋黑魚尾（花紋のない黒魚尾も混じる） 上魚尾下「選賦卷之幾 幾（丁付）」

「金在鉉章」朱文方印

藏書印 「金在鉉章」朱文方印

首に「選賦抄評註解刪補目錄」一葉（本文と同行格）、巻次「（巻之幾）は巻七まで各一行、次行以下に篇題を連記し、題下に小字で撰者姓名を記入する（前篇と同一撰者では空格とする）。巻八と巻九は巻次に下、二格を空けて篇題・撰者名を記し、裏葉末行に至って終わっており、「刪去十三篇目錄」を附さない。「選賦抄評序」がなく、續いて本文。首行「選賦抄評註解刪補卷之一」、次行「（低一格）文選（空一〇格）蕭統撰集」、第三行「（低二格）離騷經」、次行以下の本文の行格は十行本に同じ。巻二の第二行は「（低一格）文選（空一三格）蕭統 選 集」、第三行「（低二格）西京（空一四格）漢 張 衡」。以下低三格の序に續き、平擡で本文。第六冊（凡三九葉）は、序目なく本文のみで構成され、『楚辭集注』の「九歌」「九章」「天問」を収録する。首行は本編と同じく「選賦抄評註解刪補卷之一」と題し、尾

題を「選賦卷之一終」とする。印面漫滅の箇所がままあり、後印と判
断される。

又

書名卷册 選賦抄評註解刪補九卷 五册

編撰者 未詳

出版事項 「朝鮮純祖、憲宗期」刊（後印） 整版

表紙裝訂 支子色地卍字繫紋空押表紙（二六・〇×一七・六糎）原裝

五針眼裝 墨筆打付外題「文選 幾」、右下方に「共五」。

裏表紙にも「文選 幾」と墨書する。

藏書印 無

前掲六册本と同版ではあるが、さらに漫滅が進んでおり、より遅い
刷出しであろう。例えば六册本の卷三第二六葉裏の終わり二行冒頭
「充」「世」、また卷五第三七葉裏上下欄に接する部分の文字が本版で
は殆ど字をなさない。「九歌」等の附卷一册を缺く。表紙の「共五」
の墨筆は、塗改の跡が見られ、恐らく「共六」とあったのを、缺册に
合わせて「共五」と改めたと思われる。各册表紙裏の護葉に所收篇題
を記す。さらに首册表紙裏の護葉には「壬申八月左道監試」の墨書、
その裏表紙に「壬申式」、第五册裏表紙護葉に「壬申式所買來／昌平」
とあり、舊藏者が科舉應試に際して購入したことが分かる。また第四
册裏表紙護葉に「甲戌年讀于□□（二字剝去）書室」の墨書もある。
高麗大學校漢字漢文研究所の魯耀翰研究教授の御教示に據れば、「壬
申」の識語の「昌平」は全羅南道東部の地名で、「左道」も「全羅左道」、
すなわち全羅道の東部を指すとのことである。また「監試」は、科舉

の小科のことで、小科には經書の内容を試験する生員試（明經科）と
作文能力を試験する進士試があり、試験の時期は定期試験の「式年試」
を例とすると、小科の初試は上式年の八月、覆試は式年の二月に行う
ことが恆例であり、試験の科目は、生員試の場合は四書疑と五經義、
進士試の場合は賦一篇、古詩・銘・箴の中で一篇とされたが、銘と箴
の出題はほとんどなかった。よって「壬申式所買來／昌平」、「壬申八
月左道監試」の識語は、全羅道の昌平であった監試の進士試に應じた
人物がこの本を購入したことを意味しており、本版の版式や表紙から
見て「壬申」は、一八二二年（純祖十二年）と推測できるとのこと
である。

注

- (1) 『韓國所藏中國漢籍總目』五《集部》（學古房、二〇〇五年五月）頁
一七五―一七六に、高麗大學校・國會屏山書院・雅丹文庫・精神文化研
究院所藏の朝鮮木版の『選賦』を著録する。ただし、これは朝鮮の李奎報
などの作品も収録したものであり、書名を同じくするが朝鮮の編書である。
高麗大學校漢字漢文研究所の魯耀翰研究教授から提供された高麗大學校本
の畫像をもって、このことを確認した。また魯氏より韓國國立中央圖書館
所藏の『選賦抄』（BA-3716-84）の畫像も得た。この本は乙亥小字の金屬
活字本、全一册、本文すべて七五葉。班昭「東征賦」の後半「兮念日夕而
將昏」より劉孝標「廣絶交論」に至る四二編を収録する。缺損のため本文
首の書名が明らかでなく、尾題も缺いたので、正式な書名を知り得ない。「選
賦抄」の名は表紙の墨書外題により附されたものである。途中、「文選」
原編の王延壽「魯靈光殿賦」等を刪去し、「楚辭」の「九歌」五篇や「廣
絶交論」等を加えており、この本も明の凌森美本「選賦」の重刻ではない。
(2) 『選賦朱評註解刪補』の書名の誤記については、高麗大學校の魯耀翰研
究教授に確認をお願いした。
(3) 清初の潘耒が「去亦藏也」と指摘する。これは、潘耒が汲古閣本『文選』
に校語を加えた本を用いた孫志祖『文選李注補正』（嘉慶三年、一七九八序）

嘉慶四年序刊『讀書齋叢書』所收) 卷一に引用され、衆人の知るところとなつた訓義のみを示す注解である。『刪補』のごとく訓話の根據となる例を挙げた注解は、晚清・民國の李詳『選學拾藩』(光緒二十年、一八九四、李氏家刻本。のち『李審言文集』江蘇古籍出版社、一九八九年六月所收、頁一〇)に至つてようやく現れ、李氏も『漢書』蘇武傳を引く。この『刪補』の訓話は、先驅性においても注目すべきである。

【附記】

校正中に魯耀翰氏が韓國における『選賦抄評註解刪補』現藏情況の詳細な表を作成し惠寄下さつた。これによると、各收藏機關の版本の總所藏は一九八點(うち寫本は十八點)の多きに及んでゐた(殘缺本も含む)。魯氏の種々の御教示に篤く感謝申し上げます。

(立命館大學文學部特任教授)